

あっといふ間の4日間
思い出さう
大崎町ふるさと学寮



学校の先生じゃないけど先生・・・？

10月18日から3泊4日の共同生活を送る『ふるさと学寮』が、大崎町食農交流館「菜ばな」で行われ、町内の小学生約30人が集まった。児童たちは、学校から自宅ではなく、この菜ばなに帰ってくる。そして高校生や社会人の方々をゲストスピーカーとして、さまざまな話をしてもらおう。その後、食堂で『同じ釜の飯』を食う。家とは違い、自分たちで配膳をする。そして、仲間と楽しく食べつつも、肘をついて食べていると、「行儀が悪いよ。」と大人から注意される。そのうち、大人から注意される前に、仲間同士で「それよくないんじゃない？」などと、自分たちで注意し合っていた。

夕食が終わると、宿題に取り組み。机に向かいながらも、分らないところは友だちと教え合う。家ではできない、にぎやかな宿題タイムだ。難しい問題になると「先生！」と、あちらこちらで大人を呼ぶ声が聞こえる。音読を聞いたり、算数を教えたりと、先生は大忙しだ。

お父さんやお母さんでもなく、学校の先生でもない。でも、先生と呼んでしまうこの大人たちは、何者なのだろうか。こういった関係を『ナメの関係』と呼ぶことがある。学校の先生や親でもなく、同級生のような友だちでもない人。こういった存在が、子どもの豊かな成長を後押ししているように感じられた。

コラム
くつをそろえる

菜ばなに入ると、きれいにくつが並んでいた。自分たちでやったのか。言われて気付いたのか。前者ならなおよいが、そろっているという事実が目についた。

長野県円福寺住職だった藤本幸邦氏は、戦後直後から戦災孤児の救済運動を推進していた。禅の修行寺には、

『脚下照顧（きやつかしようこ）』という札が立ててある。『自分の足元を見よ』『自分の行いを見よ』という言葉だ。それを子どもたちにも分かるように、そしてそれがいつも行動として身につくようにと考えたのが、この詩だそう。

はきものをそろえると 心もそろろろ
心がそろろろと はきものもそろろろ
ぬぐとときに そろえておくと
はくとときに 心がみだれない
だれかが みだしておいたら
だまっつて そろえておいてあげよう
そうすればきつと
世界中の 人の心も そろろろでしょう

誰かのはきものが、みだれていたら、黙ってそっとそろえてあげられるような人こそが、本当に思いやりのある人なのかもしれない。

そんな人がひとりでも増えれば、そんな子どもがたくさん育てば世の中は、もつともつと素敵なものになるでしょう。

今回の記事を書いたのは



こやま じゅんや
小山潤也
地域おこし協力隊

教育委員会管理課に所属。
大崎中学校にて『かけはしサポーター』として活動中。

